此処にいるモノ

菜月 桜花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
此処にいるモノ

【Ｎコード】
Ｎ１８１４Ｍ

【作者名】
菜月　桜花

【あらすじ】
家族の繋がりがバラバラになっていく家の中で、主人公は何か得体の知れないモノの気配を感じる。

ホラーとしてありますが、怖さは控えめです。

（一）階段を上がるモノ

その頃、近くに住む祖母と母の折り合いが悪く、そのせいか両親の喧嘩が絶えなかった。怒鳴り合う声、物がぶつかる音、夜中に母が家を出る時の車のエンジン音。家の中で聞こえる音のすべてが苦痛でしかなかった。

当時、大学生の兄は、ほとんど家には帰らなかったが、まだ中学生だった私は学校から帰ると二階の自分の部屋に閉じ籠もっていることしかできなかった。

まだ幼く、自分では解放しきれない鬱憤を、誰もいない部屋で暴れたり、叫んだりしていた。部屋の壁には物がぶつかった穴が幾つもあった。両親は娘の様子を知らなかったのか、知らない振りをしていたのか。

それでも何故か、外へ出ようとは思わなかった。学校からは　真っ直ぐに帰宅する。何人かいた友人の誘いも断って帰っていた。

南側に大きな窓のある私の部屋は、北側に出入り用のドアがあった。階段を上がりきるとすぐが私の部屋で、内側からドアを開けると階段の最上段が見える。その奥が兄の部屋だ。

両親が仕事に行っている昼間の音のしない家が好きだった。ただベッドに横たわり、静寂という安堵の中で過ごす。息をする音さえもなるべく押さえて。

そんな毎日をただ過ごしていたある日、その静寂を破って音が入ってきた。静かに階段を上がる足音。兄が帰宅したのかと、耳を済ま

せて待った。私の部屋を覗いてくれるかもしれない。そんな淡い期待をして。

上がりきったのか静寂が戻る。そこに立ち止まったままなのか、ドアの外を通る気配がしない。ドアを開けてみたが何も無い。兄の部屋を覗いても、階下に降りても誰もいない。確かに音はしたのに。

空き巣かと思い、恐る恐る玄関を確認する。鍵はかかっていた。他に出入りできそうな裏口や窓も、やはり鍵がかかっていた。家の中には自分以外は誰もいない。

それからも度々音を聞くようになった。最初のうちは都度ドアを開けて確認していたが、いつも誰もいない。家鳴りかとも思ったが、どうしても階段を上がる足音に聞こえていた。

私は部屋のドアを開けたままにして過ごすことにした。音の正体を確認したかったのだ。不思議と恐怖は無かった。何もかもどうでもいいやと、思っていたからかもしれない。

その日は雨が降っていた。体調が悪いと学校を休んだ私は、ベッドでうとうとしているところだった。急にドンッと大きな音がして、目を開けた。

また両親が争いを始めたのかと布団に潜ろうとして、まだ窓の外が明るいことに気づいた。両親が明るい内に帰って来ることはない。今度こそ兄かと考え、体を起こすとドアの方へ目を向けた。

その時、ドンッと二度目の音がして、それが階段を上がる音だとわかった。かなり乱暴に、だけど一段ずつゆっくりと上がってくる音。ドンッ、ドンッ。音が近付いてくる。兄の名を呼ぼうと口を開いた

が、喉が渇ききっていて声は出ない。

それは徐々に近づいてくる。いつもよりかなり大きな音に初めて恐怖を感じた。思わず目を閉じると、音と音の間隔が短くなる。来ないでっと心のうちで叫びながら無意識に音の回数を数えていた。１３回目、階段の最上段の段数を上りきったであろう所で静かになる。上がって来たものが人ならば、最上段に立っているはずだ。

確認すると決めたのに、どうしても目が開けられない。なぜか見てはいけない気がしてならない。それはそこにいるのか？

どれくらいの時間がたったのか、顔に流れる汗が膝の上で握りしめる手の甲に落ちた。ゆっくりと目を開ける。薄暗い部屋のドアの外、階段には誰もいない。何も無い。もちろん見渡した部屋の中にも。

水が飲みたい、顔が洗いたい、そう思ってベッドを降り部屋を出た。階段の最上段から下を見る。いつもと変わった様子は無い。兄が私を驚かそうとしたのかとも思ったが、昔ならともかく今の兄がそんなことをするはずがないと苦笑する。

ベッドに座ったまま夢をみた？だとしたら、私も相当病んでいるんだろう。

そんなことを考えてから、念のため兄の部屋を覗く。少し散らかっているのは、いつものことだ。ドアノブに触れた手に埃がついた。どれだけ兄はここに帰っていないのだろう。少しの寂しさを感じ人気の無い部屋のドアを閉める。

私だけでなく家族の各々が暗く重いモノを心の中に積もらせていたに違いない。

ドアを背に、歩きだそうと階段の方へ向き直ったその時、さっきまでドアノブを握っていた右手が何かに引かれた。人の手のような、それもひどく冷たいモノ。驚いて振り返るが、そこは目の前にドアがあるだけだ。

ドアノブに引っ掛かっただけだろうと思い込み、もう一度歩きだそうと振り向こうとした。

その時、はーっと低く枯れた声と息を吐く音が耳のすぐそばで聞こえた。同時に息が首筋にかかる。丁度肩の後ろから覗かれているような感覚。

何かがいる。得体のしれないモノが。逃げ場を探し無意識に半歩下がる。耳元で息を吐いたモノは、すぐ後ろにいるはずなのに、下げた足は何の障害もなく下がった。何がいるのか確認しようとしても、恐れから振り向くことができない。確かにそれは顔のすぐそばにいる。いや、すぐそばにある？

パニックになり闇雲に腕を振りながら、目を瞑って振り返り駆け出そうとする足を、今度は掴まれた。前のめりに倒れ、慌てて両手をつく。床の木目が視界いっぱいになる直前に、なんとか体を支えた。足を掴まれる感覚はもう無い。しかし、腰が抜けたのか立ち上がれない。

恐怖はピークに達し、そのままうずくまる顔のすぐ上で、もう一度息を吐く気配がした。私は何か叫んだように思う。あまりの恐怖にそこから記憶が曖昧だ。気を失ってしまったのだろう。

（二）部屋に立つモノ

寒さに震えて目を覚ました。兄の部屋の前にうつ伏せになったまま顔だけ上げて視線をあげる。すでに暗くなっているがいつもと同じ二階の廊下。目が慣れてくると、あちこち痛む体を起こし、立ち上がった。

階下からは、母がキッチンで作業する音が聞こえる。学校を休んだ娘が廊下に倒れていたことに、全く気づかない母親。ただ事務的に家事をこなしているだけなのだろう。

部屋に戻るとベッドに寝転んだ。見慣れた天井を見上げる。右手を額に当て熱さを確認する。熱があるようだ。布団を引き上げて潜りこんだ。

熱が見せた幻覚だったのか？いや、姿を見た訳では無いから幻聴と言うべきか？

いつの間にか眠っていたらしく、部屋のドアをノックする音で布団から這い出す。食事を盆に乗せて入ってきた母は、具合はどう？とこちらも見ずに問う。平気、と答えて母に背を向けるように横になった。

目を瞑り、少し痩せた母の姿を頭の中から消そうとした。一番辛いのは母だろうと解ってはいたが、それでも大人で親なのだから子供を守れと、無言で責め続けていた。

しばらくして、母はお願いがあると言った。聞きなれない単語に体を起こして、母の方を向く。母は手元の盆を見たままこちらも見ず

に、今夜からこの部屋で寝させてほしいと呟くくらいの小さな声で言った。

母の寝室は父と一緒だ。不仲になってからは、父が寝たのを確認してから寝室へ行き、父が起きる前に出るという生活を送っていた。睡眠時間が確保できずつらかったのだろう。フルタイムで働く仕事にも影響し始めたのかも知れない。

部屋で1人でいる時間が好きだった。母でさえ、いや母だからこそ、その空間を侵されるのは嫌だった。けれど無言で答えない私の方を、やっと見た母のやつれた顔に頷いていた。

母より早く眠ってしまえばいい。私と父が食事を済ませた後、一人で食事をする母がベッドに入るのは深夜だ。それまでに眠ってしまえばいい。両親を拒絶しているのは私の方だ。

父が寝た後、キッチンに降りた。冷蔵庫を開けてお茶を取り出す。足元にすり寄ってきた猫の頭を撫でて、グラスに注いだお茶を飲み干す。続けて二杯、一気に飲むとしゃがみこんで猫と向き合った。

濃いグレーの毛色にがっちりした体型の雄猫は、食事のときだけ帰ってくるが、ほとんど家には寄り付かない。一度近所の空き地で見かけたが普段はどこにいるのだろう。飼っていると思っているのは私達だけで、実際には他にも餌をくれる家があるのかもしれない。自由でいいと羨ましく思う。一人で生きていけたらいいと。

何を考えているのか、こちらをじっと見つめる金色の目に、なぜか安堵して涙がこぼれた。床に座り膝を抱えて涙が収まるのを待つ間、猫はただ横に座ってそこに居てくれていた。

部屋に戻ると客用の布団が壁側に敷いてあった。今夜から母がここに寝る。ベッドに入り反対側を向いて目を閉じた。昼間もかなり眠ったのに、あんなことがあったからか、疲労を感じてすぐに眠りにつくことができた。

気配を感じた。母が来たのだろう。ベッドの脇、背後に立っている気配。こちらを見ているのか動かずに立ったままだ。おかしいなと思ったが、酔っているかもしれない母と話すのは嫌だった。酔うと陽気になってすぐ寝てしまう父と違い、母はしつこく絡んだり泣いたりする。時々深夜に、誰かと電話で話しながら泣く母を見たことがあった。

まだ、立っている。いい加減寝たら、と言おうと振り返ろうとしたが体が動かない。慌てて目を開けた。壁に向いたままの姿勢だ。とにかく体の先端を動かそうとしたが、顔の前にある手さえ動かない。

暫くそうやって身体に神経を集中していたら、後ろから布団の中で身動きをする衣擦れの音と、母の寝息が聞こえた。母は寝ているのか。後ろに立っているのは、母では無いのか。

動かない体に汗が吹き出す。辛うじて動く目で必死に後ろを見ようとしてみる。その時、後ろに立つモノが屈んでこちらに近づいた。目の端に長い髪が見えた。父でも兄でも無い、母でも無い長い髪。ギュッと目を閉じる。体は相変わらず動かず、逃げることもできない。

覗きこんでいるのか、かなり近くに気配を感じた。昼間も感じた息を吐く音。時折ヒューヒューと喉がなる音が混じっていた。息がかかる頬に固く冷たい何かが触れた。髪の毛だと気づいた瞬間、体が動いた。闇雲に手足を動かし、ああっと叫んで体を起こした。

触れられる位置にいたはずのモノには触れず振り回した手は空を切った。目を開けると、いつもと変わらない自分の部屋。いつもと違う客用の布団は、今の叫びにも気付かず、静かに上下している。

誰も、何も居なかった。昼間と同じ気配。夢じゃないはずだ。熱のせいでもない。それに、あのヒューヒューと鳴る喉を息が抜ける音は、どこかで聞いた事があった。私はあれを知っている。昔どこかで、聞いた音だ。

記憶を手繰り寄せて必死に思いだそうと両手で頭を抱えた。不意にあの吐息と髪の感触を思い出して身震いした。布団に潜りうずくまる。あれは一体なんなのだろう。誰、なのだろう。生きている人間では無いのか。それでも何故か、それほど恐怖には思わなかった。普通の少女の感情さえ失い始めていたのかもしれない。

（三）憑依するモノ（前書き）

少々ですが暴力表現を含みます。苦手な方は回避をお願いします。

（三）憑依するモノ

朝、母が布団を畳む気配で目覚めた。布団を部屋の隅に積むと、しばらく壁の穴を見詰め部屋を出ていった。昨夜のアレに母は気付いていないのだろうか。

髪が触れた感触を思い出し、頬に手を当てた。驚いてすぐに離し、もう一度首筋あたりに手をやり、絡んだモノを顔から離した。起き上がり手を見る。長い髪の毛が何本も手に絡みついていた。すぐに屑入れに捨て、内袋にしていたコンビニ袋の口を縛りそれを掴むとキッチンへ降りた。

やはり、夢では無かったのだ。アレは確かに昨夜ここにいた。そして、私を覗き込み髪の毛を落としていったのだ。長く傷んだその髪の毛は、ほとんどが白髪だった。

白髪、そしてあの喉を抜ける息の音。
アレは誰なのだろう。キッチンに立つ母におはようと声をかけたが返事は無い。父は居間で新聞を読んでいた。

コンビニ袋をゴミ袋に入れると、洗面所で手を洗う。絡み付いたあの感触を消す為に何度も、何度も。それから顔を洗って、鏡を覗いた。青い顔、隈まであるが熱は下がったようだ。

再びキッチンに行き、母に学校へ行くと告げると、二階へ上がった。ふと、兄の部屋のドアを見る。少しだけ開いていた。昨日の昼間、初めてアレにあった時、ドアは閉めたはずだ。気になってドアに近づいた。兄が帰っていたらと淡い期待もして。

その時、階下から大きな音が聞こえた。階段まで戻り下の様子を伺う。父の怒鳴り声と、続いてまた大きな音、居間と奥の和室を繋ぐ引き戸を思い切り閉めた音だ。

静かに階段を降りる。居間へ向かおうとして、立ち止まった。開いた居間のドアの前に猫が座り、じっと中を見詰めていた。奥からは父と怒鳴り合う、少し掠れた高い声が聞こえていた。

祖母だ。近所に住む祖母は時々、出勤前の父を訪ねてくる。祖母は難しい人で、孫である私達にさえ冷たくあたる。兄も私も祖母が来ている時は二階から降りずに帰るのを待っていた。

気に入らないことがあると、手を上げる。幼い頃、母が叩かれていたのを見てから、祖母には近づけなくなった。大人が大人を叩く行為にかなりの嫌悪感を抱いた。

父と祖母の言い争いはまだ続いている。母の気配は感じない。奥の和室に逃げ込んだのかもしれない。恐らく今でも、祖母は母を叩くだろう。老女の力はそれほど強くは無いだろうが、叩かれると言う行為は、母の心を打ちのめすのには十分すぎる。

一歩後退り二階に戻ろうとした瞬間、猫が弾かれたようにこちらへ走りだした。と、同時に居間のドアから何かが大きな音を立てて飛んできた。猫は私の少し前で止まり、振り返って飛んで来たものを見ている。

それは、座椅子だった。居間にある木製の座椅子。考えたくは無かったが、父が投げたのか。不仲になっても父が母に暴力をふるう事は無かったのだ。その父が実の親である祖母に座椅子を投げたのか。

祖母に当たったのではないか。呆然と座椅子を見詰めていると、居間の入り口から腕が伸びて座椅子を部屋に引き込んだ。そして再び大きな音がする。音と同時に猫が居間へ走って行った。

私は動けなかった。居間に座椅子を引き込んだのは、細く皮ばかりの腕、祖母の腕だったのだ。立っていられないほどの動悸がして、壁に手をつくと、体を支えるようにしてのろのろと歩き居間を覗いた。

入り口からすぐの所に祖母が立っている背中が見えた。肩で息をしている。その奥、家具調炬燵を挟んだ向こうに父が座り込んで祖母を見詰めていた。父の脇に座椅子が転がっている。よく見ると炬燵の天板が父に向かって傾いていた。

天板には大きな傷も出来ている。転がった座椅子は、祖母が父に向かって投げたのだ。少なくとも二回目は。父の様子でぶつかってはいない事はわかった。それでもひどいショックを受けているようだ。

先に居間に入った猫は父と祖母の間、傾いた天板の上で祖母に向かい頭を低くして唸っていた。まるで父を守るように、祖母を威嚇しているように。

久しぶりに見た祖母は、前より小さくなっていた。この細い体のどこに座椅子を投げる力があったのか。立ちすくみ祖母の背中を見詰める私に気付いた父が、二階に上がっていろと怒鳴った。

慌てて駆け出そうとしたが、足がもつれて転んだ。

急いで立ち上がる瞬間、振り返った祖母の顔が見えた。息を飲み、逃げるように四つん這いの状態で階段へ向かった。二階に上がり切った所で、誰かが玄関から出ていく音がしたが、振り返る事が出来

なかった。

一瞬見えた祖母の顔、あれは本当に祖母なのか。あの恐ろしい形相が、人間のものなのか。思い返し、ひどくなる動悸を抑えようと、階段の手すりを掴んだまま、座り込んだ。

確かに、孫にさえ笑顔を見せない祖母は、普段からひどく神経質そうな冷たい顔をしていた。その皺に囲まれた細い目で、ちらと見られただけで、私なんて逃げ出したい衝動に駆られるくらいだった。

しかし、今見た祖母の顔は、これまでのどんな冷酷な表情にも比べ物にならないほどだった。いや、あれは本当に人の顔だったのか。良くできた般若の面を被っていたのではないか。

信じられない位につり上がった目は、ほとんど白眼に見えた。つり上がった状態で、目を剥いていたような。思い出すと震えて、また動悸が激しくなる。

祖母はどうしてしまったのか。あのまま死んでしまうのではないかと思った。もしかしたら、昨日のアレが、祖母に何か影響したのかもしれない。憑依されたのではないか。あの何か得体のしれないモノに。

（四）床を這うモノ

階段の最上段で座り込んだまま、胸元の服の生地を握りしめ深呼吸を繰り返していた。それでも動悸は治まらない。床の木目を見詰めながら、そこに雫が落ちているのに気付いた。それは今も一つずつ増え、小さな水溜まりを広げていく。

なぜ、こんな事が起こるのか。祖母と母の確執が、両親の仲を蝕み、兄は家に帰らない。そして祖母はあんな様子で。どんなに考えても答えなど出ず、自分はなんて非力なのだろうと思った。兄だったら、何かできるかもしれない。そう思い、兄の部屋のドアを見た。

ドアは少し開いたままだ。誰が開けたのだろう。右手の袖口で涙を拭うと立ち上がって、兄の部屋へ向かう。階段から離れかけた時、下から母の声がした。父も母も出かけると言う。あんな事があったのに普通に出勤するようだ。わかったと返事をして、階下を伺う。父の車のエンジン音がして、母が玄関を出る気配がした。

しばらくそこに立ち竦んでいた。祖母のあの状態も両親の中では日常に支障を来すほどでは無いのか。祖母は普通に帰宅したのだろうか。何も知らされず、ただ起こる事を見ているだけなのが歯痒い。なぜ私だけ子供なんだろう。

思わず壁を叩く。その音に反応したのか猫が階段を上がってきた。あの騒ぎでエサをもらえなかったのかと、少し穏やかな気持ちになる。足元まで来てこちらを見上げた。抱き上げて下へ降りようとして、また兄の部屋のドアが気になった。猫を抱いたままドアに近づく。ドアの直前で猫は飛び降りてしまった。手から逃れた温もりに少し心細くなる。

開いた隙間から中を覗いた。薄暗い部屋、カーテンを透かした淡い青が辛うじて床を照らしている。部屋の隅までは見えないものの、人がいる気配は無かった。兄はいない。溜め息をついてドアを閉めようとノブに手を掛けた。その時、ずずっと何かを引きずるような音が部屋の中から聞こえた。音を確認しようと、じっと動かずに待つ。

暫く何も聞こえなかった。開いたドアから見える範囲には何の変化も無い。足元でじっとしていた猫が、急に立ち上がりドアの隙間から部屋の中を覗いた。また、ずずっと音がしてその瞬間、猫の体毛が逆立った。尻尾の毛も広がり、二倍位の太さになる。一歩後ずさって唸り声をあげた。

猫の様子に驚いて、部屋の中に視線を移す。ずずっ、ずずっと音が断続的になり、そしてそれが隙間を横断した。淡い青の部屋の床を黒っぽい塊がくねるように、這っている。

動悸が激しくなり、呼吸が荒くなる。ドアの隙間からその塊を確認する事はできないが何か恐ろしいモノのような気がした。逃げ出したいのに体が動かない。もう一度ずずっと音がした瞬間、猫が唸り声をあげて部屋へ飛び込んだ。隙間からは見えない所で、どたばたと暴れる音がする。その中に、猫のものではないうめき声や叫び声がした。

体はまだ動かない。逃げることも部屋の中を見ることも出来ない。ドアノブに掛けた手のひらから、汗が吹き出しすべった。そのせいで少しだけ、ドアが開く。

思わず目を閉じた。同時に部屋の中の音が止んだ。そして猫が爪を

立てたまま床を歩く音が近づいて、目を開けた。俯いていた視界の中に入ってきた猫は、毛の逆立ちは収まっていたが、耳の辺りにべっとりと、血のような物がついていた。慌てて触れようとした手をすり抜け、階段を降りて行ってしまった。

猫の去った後を見送り、ドアの隙間に視線を戻す。何の変わりもない兄の部屋。猫は何と争っていたのか。深呼吸を一つして、ドアノブに手を掛け引いた。淡い青色の室内。少し散らかっているのはいつものことだ。むっと鼻につく臭いに気付き、室内に入るのを躊躇した。部屋の入り口に立ったまま中を見回す。さっきと変わらないと思ったが、良く見ると、床や壁に毛のようなモノが散らばっている。猫の毛もあるが、もう少し長い毛が混ざっていた。

獣だ、と思った。臭いも毛も。前に兄と行ったペットショップの臭いを強くした感じに似ている。猫からはこんなに強い臭いはしない。ならばさっきの黒っぽい塊が何かの動物だったと言うのか。動物なら、どこから入った？いや、まだこの中に隠れている？

動物なら、恐れる事は無いと自分に言い聞かせ部屋の中へ入った。きつい臭いに袖口で鼻を覆う。何かがいる気配は無い。とりあえずカーテンと窓を開ける。風が入り臭いが和らいだ。明るくなった部屋を見回して、何かが隠れられそうな場所を探す。

毛が散らばっている床の先にベッド、その下に空間がある。ここからでは遠くて見えないが、猫くらいの動物なら簡単に隠れられそうだ。しかし、さっきドアの隙間から見えた塊はそんなに小さくなかった気もする。周りを見ても他に隠れられそうな場所は無い。

一度部屋を出て、廊下の納戸から長柄ホウキを持ってきた。ベッドの近くに寄り、ホウキを下の空間に差し入れた。しゃがみこんで臭

いがここから出ている事に気づく。何かが動く気配は無いが、思いきって握ったホウキの柄を左右に振った。一瞬何かに引っ掛かったが、ホウキはベッドの下を隈無く移動できた。何かがいる気配も無い。

もう一度さっき引っ掛かった辺りにホウキを差し込もうとした時、部屋の空気が変わった。背中のすぐそばで何かが動いた。ヒューヒューと喉を息が抜けるあの音。そして、耳にと言うより頭に直接響くような低く掠れた声がした。

出ていけ、と。

（五）傷つけるモノ（前書き）

少しですが暴力表現を含みます。苦手な方は回避をお願いします。

（五）傷つけるモノ

昨夜ベッドの脇に立っていたモノと同じ気配だ。後ろにいる。ヒューヒューと息の抜ける音は耳のすぐそばでしていた。ホウキの柄を握りしめ背後の気配を伺う。ホウキは武器にはならないだろう。けれど何も無いよりは、少しだけ心強かった。振り回せば、逃げ出す間くらいはできるかもしれない。

息をのみ背中に神経を集中する。背後の気配が動いた。息の音の間に何か喋っているような声がしている。僅かに離れた気がして、ホウキの柄を握る手に力を入れた。再びベッドの下へ意識を移す。臭いはそこからする。背後にいるモノとは別の何かが、この中にある気がした。

背後のモノがさらに離れた気がした。まだボソボソと話す声がする。おそらく今振り返れば、何が居るのか確認する事はできそうだが、そんな勇気はない。何を話しているのか、背後に集中して聞いてみたが、掠れた低い声は上手く聞き取れなかった。僅かに、やめろ、と言った気がした。

今ならホウキを振り回せば、逃げられるかもしれない。握る手に力を込め立ち上がる。同時に引っ張ったホウキの柄は、全く動かなかった。何かに引っ掛かったかと、左右に揺さぶってみたが、それでも動かない。一瞬パニックになり、がむしゃらに引き抜いた。

後ろからやめろと叫ぶ声がした。同時に強い力でホウキを前に引っ張られた。しゃがんだ姿勢からうつ伏せになり、顎を床に強打した。口の中に鉄の味がする。一瞬の事で手を離す暇もなく、そのままものすごい勢いでベッドの下へと引きずられた。

その空間は人が入れる高さは無く、腕だけを目一杯、さしいれた所で身体が引っ掛かり止まった。慌ててホウキを離した手を、何かに捕まれて更に引っ張られる。木製のベッドの枠に肩と首が擦れた痛みと、腕を掴む得体の知れないモノへの恐怖に叫び声をあげた。

腕を掴んでいるのは、骨の感触がわかるほど痩せた人間の手のようだった。ギリギリと握る力を強めている。私の腕を目一杯引き込んでいるのに更に奥へ引こうとする手の本体は、どこにあるのか。ベッドは壁にぴったりつけてある。この隙間に人が入れるはずはない。異(い)なるモノに傷つけられる恐怖に、死を予感した。なんとか逃れよう、涙を流し助けを呼び叫ぶ私の声は、家の中に響いていた。誰も助けには来ない。誰もいない。自分は今独りきりだ。

あまりの痛みに抵抗していた力を緩めると、肘のあたりが鈍い音をたてた。折れるかもしれない、遠くなる意識の中で、考えていると、ふいに腕を掴んでいた手の力が緩んだ。同時に強い力で後ろへ引っ張られ、その勢いでドアのあたりに身体を打ち付けた。激痛に座りこんだまま、うつむいていると、再び喉を抜ける息の音が近づき、出ていけ、と擦れた声が聞こえた。

慌てて起き上がる。目の端に浴衣の様なものを着た人影が、ゆらゆらと動きながらこちらに近づくのが見え、その異様さから逃れようと、這うようにして部屋を出た。痛む身体を無理に起こし、階段へ向かう。立ち上がることが出来ず、引っ張られた右腕は痛みで全く動かない。左腕でなんとか身体を支え、這ったまま進む。

動かない腕を見ると、手首には赤黒く手の跡がついている。肘の辺りも紫色になっていた。少しでも遠くへ逃げたくて、引きずるよう

になんとか進む。

ベッドの下にいた獣臭いモノが、腕を掴み引き込もうとしていた。おそらく悪意を持っている。しかし、後にいたモノはあの手から私を助けてくれたように思えた。アレは人のようだった。浴衣の様なものを着ていた。

おかしな感覚だった。腕を引かれ身体に痛みを受けた、その事は恐怖に違いなかったが、あのヒューヒューという音に、出ていけと言った声には、それほど恐怖を感じなかった気がする。二体だと思うのだ。二体いる。人ではないモノが。気を抜くと手離しそうになる意識を繋ぎ続けようと、思考を巡らす。なぜ、この家に、私の前に現れたのだろうか。あれらは何者なのだろう。

部屋から階段までの数メートルがかなりの距離に感じた。やっと到着した時に振り返ったが兄の部屋から追いかけてくる気配は無かった。何故かドアも閉まっている。獣の臭いもしなかった。いつもと変わらない廊下に息をつく。

それでも、痛む右腕が恐怖を思いだし、身体が震えだした。階段を降りようと上げた足は意思通りには動かず、もつれる足が段を踏み外した。そのまま滑り台のように最下段まで滑り落ちた。背中と腰に激痛がして、しばらくそのまま動けなかった。

しばらくそのまま放心した状態で座り込んでいた。痛みが少し和らいだ感じがして、ゆっくりと二階を見上げる。階段の最上段に立つ骨ばった細い裸足の足が見えた。それが何を意味するのか、思考は遮られた。極度の疲労と身体中に広がる鈍い痛みに意識を手放した。意識が無くなる直前に、誰かが玄関の鍵を開ける音がした。助けを求めて伸ばし上げた左手は、空を掻きそのまま床に落ちるだけだっ

た。

（六）呪いを唱えるモノ

体を揺すられ覚醒した。目の前には、驚き心配そうにこちらを見つめる懐かしい顔。少し痩せた兄に安堵し、気が緩んだ。涙が溢れ止める事ができず、すがりつき泣きわめいた。

両親の事、祖母の事、そして自分を傷つけたモノの事を、泣きながら話す私の言葉を兄はじっと聞いていた。おそらくは、ほとんど聞き取れず訳がわからなかったに違いないが、兄は何か考えこむようにして、私の背中を擦っていた。

少し落ち着いてきた私を立たせると、支えるように二階へ上がらせた。腰と背中が痛むがなんとか自分の部屋へ上がりベッドに横たわる。肘はまだ違和感があるが手首の痕は薄くなっていた。

医者に行くか、と兄に聞かれ首を振った。ただの打ち身だ。階段を上がれたから大丈夫だろう。それよりも今はただ、休みたかった。今なら一人ではない。ベッドの脇に立つ兄の手を掴み、ここにいるよう頼んだ。

兄の右手の平が瞼の上に被さる。温かさに安心して目を閉じた。思えば家族と触れるのも久しぶりだった。母や父には近づく事さえ、出来ない日々が続いていたから。同じ屋根の下にいても、ひとりぼっちな気がしていた。どんなに恐ろしい目にあっても、頼れるところが無ければ、人は強くなるしか無いのかもしれない。

両親の前では泣く事もできなくなっていた自分にとって、兄はただ一つの支えだった。私はずっと彼の帰りを切望していたのだ。望みは叶い、兄がいる安心感に身体の痛み、疲労、様々なものが睡魔を

誘う。涙が流れる前に眠りに落ちた。目覚めたら何もかもが夢で、昔のような両親と兄がいる穏やかな朝であれと、願いながら。

目覚めた時には、部屋は真っ暗になっていた。兄はいない。鈍く痛む身体を起こし、腰や背中を庇いながらベッドの端に座るようにして、時計に目をやる。もう夜になっていた。

兄は部屋に戻ったのか。ゆっくり立ち上がるとドアに向かう。母の布団は部屋の隅に畳まれたままだ。ドアを開けて廊下に出る。静寂に少し怯んだ。何の物音もしない。昼間の好きな静寂とは違う。父は休んでいても母はまだ階下にいるはずなのに、何の気配も感じない。

部屋を出てすぐに立ちすくんだ。昼間の恐怖が甦る。兄の部屋のドアを見た。閉じたドアの隙間から漏れる光は無い。寝ているとは思えなかった。おそらく、いや間違いなく兄はいない。

途端に不安になり、兄を呼ぶ。何度も叫ぶように。けれども、身体を進める事はできず、床に手をつく。少し痛む肘に身体に刻まれた恐怖心が再び沸き上がる。自分の声以外は何も聞こえない。静寂に追いたてられるように這ったまま部屋に戻る。

何故、誰もいない？母は帰っていないのか。あんなに頼んだのに、兄は自分を置いて、またどこかへ行ってしまったのか。一人でも立てていたはずなのに、少しだけ会えた兄に、心が寄りかかってしまった。怖い。淋しい。助けて。うずくまり、自分で自分を抱き締める。涙が溢れ、嗚咽がもれる。兄の名前を何度も呼ぶ。怖い。淋しい。助けて。

とととっと階段を上がる小さな足音が聞こえ、顔を拭いながら上げ

る。閉めたドアの外で鳴く猫の気配に、何故か少しほっとする。人でなくても、生きている存在が恋しかった。立ち上がりながらドアを開けて猫を部屋に入れる。足元にまとわりつく猫の耳には、大きなかさぶたができていた。昼間やはり怪我をしたのだ。

そこに触れないように撫でると、満足そうに目を細め、すっと手をすり抜けてベッドの上に丸くなった。そばに居てくれるようだ。こんな小さな生き物でも、一人でないことが心強かった。ドアを少し開けて、もう一度階下を伺う。誰もいないのだ。それはわかっているのに、下に降りて確認することで、またひとりぼっちだと認めるのが怖かった。

ドアを開けたまま、ベッドに潜る。背中に丸くなる猫の温もりを感じ、目を閉じた。兄は何故、ここに居てくれないのだろうか。もしかしたら兄も、あのモノの存在を知っているのかもしれない。あれは兄の部屋にいた。自分より先に遭遇していても、おかしくはない。考えながら背中に温もりを感じ、うとうととしていた。猫の喉がなる音を聞きながら。

急に入ってきた音に、目を開けた。ドンっと言う階段を上がる音。すぐに兄や母では無いことに気づいた。足音に重なるように、何か大声で話している枯れた高い声が上がってくる。切迫したようなその声に、怖くなって布団を引き上げようとしたが、手が動かない。手だけでなく、身体が動かなかった。それでも足音と声は近づいてくる。

なんとか動こうと指先や足先に力をこめるが、近づいてくる音に焦り、息苦しくなるだけだった。そばにいたはずの猫の気配もしない。もがいてみてもどうにもならない。出ない声で兄を呼ぶ。怖い。助けて。

思わず目を閉じる。同時に音と声が止んだ。階段の最上段に到着したようだ。身体が動く気配は無い。しばらく静寂が続く。自分が吐く早い呼吸の音しか聞こえない。静寂は尚、続く。身体は動かない。怖い。助けて。声にはならない。

どれだけ静寂が続いたか。緊張感は限界に近づき、意識が遠くなりかけていた。身体は動かない。もう一度力を入れた瞬間、すぐ近くで、掠れた高い声がした。思わず開けた目の前に、それはいた。暗い部屋でも、はっきり見えるくらいの近さだった。ひっと喉がなる。吸い込んだ空気は獣の臭いがした。咳き込めず喉がふさがる感じがして息ができない。

高い声で怒鳴っている言葉は何を言っているのかわからない。それでも憎悪を向けられているのはわかった。息ができず、意識が遠くなる。

何故？何故そんなにも私達を憎むの？出せない言葉を意識で伝える。仰向けになった自分の上にいるはずなのに、全く重さを感じないそれは、乱れた髪に覆われ、つり上がった目に呪文のような言葉を吐く、祖母の姿だった。

（七）守るモノ

恐怖と驚きで、目を閉じることが出来ず、痛みで出た涙で祖母の顔が歪む。呼吸も上手くできない。次の瞬間、首に圧迫を感じ呼吸が止まる。力を込めても身体は動かず、抵抗もできない。このまま死ぬんだ。何故、祖母が自分を殺めようとするのか、理由もわからないままで、死んでしまうんだ。もう、どうでもいい。自分なんて、死んでしまってもいい。

どうせひとりぼっちなんだから。自棄になり、諦めたせいで力が抜けた時、右側から黒い塊が唸り声を上げて、祖母の顔を目掛けて飛び付いた。甲高い声で叫びながら、祖母の顔が転がり落ちた。

同時に身体に自由が戻る。何度もまばたきをして、何度も咳き込みながら、転がる祖母の顔と、黒い塊を目で追う。唸り声をあげて、体全体でしっかりと噛みついている猫と、苦しそうにのたうつ、祖母の頭部だけを。

叫ぼうとした喉は、乾いて貼り付き、音が出ることは無かった。あれは、祖母では無かった。祖母の顔をしているけれど、あれは祖母では無い。乱れた髪の下に獣のような毛皮が見える。頭部に対して極端に小さい身体。恐ろしく異質なその姿から目が離せなかった。今、自分の身に起きている事が、何なのかも認識できずに、ただそのモノを見つめていた。

それは奇妙な動きで猫を振り落とし、再びこちらに向かって、叫びながら飛びかかってきた。恐ろしい形相の祖母の顔で。一瞬の事で、避ける事もできず、ただ目を瞑って、防御をしようとして出した手には何も触れなかった。

唸り声では無い猫の声がしたのと同時に、祖母の叫び声も止まる。静かになった部屋に、自分の呼吸音に混じって、あのヒューヒューと喉を通る息の音が聞こえた。猫がベッドに上がり、身体の脇に寄り添う気配がして、ゆっくり目を開ける。

獣の臭いが薄れて、代わりに煙草のような匂いが微かにし始めた。半身を起こし、部屋の中央に向けた視界に浴衣姿の背中が見えた。丸まって何かを抱き込んでいるようにして立っている。

祖母の顔をしたモノが見当たらない。獣の臭いが薄れていき、煙草の匂いが強くなる。それに伴い、恐怖に怯えて、速くなっていた鼓動が落ち着いてきた。この匂いはどこか懐かしい気持ちになる。目の前に突然現れた浴衣姿のモノに、何故か恐怖では無い、不思議な安心感を感じていた。猫がベッドを降りて、その足元にすりより、そのまま部屋を出て行く。手を伸ばせば触れられそうな位置にある、その浴衣の柄にも、見覚えがあった。

しばらく見つめていた、丸まっていた背中が伸び、それがゆっくりと振り返り始めた時、玄関の扉を開く音が聞こえた。ビニール袋の擦れる音と、階段を上がる足音に、思わず部屋のドアを見る。少し開いた扉の隙間に光がさして、部屋の中にオレンジの筋を作っていた。辿った先にいたはずの浴衣姿のモノは消えていた。見渡す部屋の中には、何もいない。ぼおっとした頭の中に直接入ってくるように、低く掠れた声が入ってきた。連れていく、と。

コンビニ袋をぶら下げて、兄がドアを開けた時に、すまなかったと、もう一度声が聞こえた。兄が一瞬ギョッとして、部屋を見回し、慌てて照明のスイッチを押した。もう一度部屋を見回し、少し悲しそうな顔をして、こちらに近づいてきた。兄にも聞こえたようだった。

兄の手が触れた瞬間、恐怖と、何故か悲しい気持ちと、自分を置いてどこかへ行ってしまった兄に対する責めの気持ちで、また涙が溢れた。自分を抱きしめる兄の丸まった背中に手を回し、さっきの浴衣の背中を思いだす。あの背中は、祖母の顔をしたモノを抱きしめていたのではないか。こうやって、兄が自分にしているように。

あの浴衣姿のモノは、私を助けてくれた気がしていた。でも、少し違う。私だけでなく、祖母の顔をしたモノを守っていたのかもしれない。泣き止んだ顔を手で拭って、兄を見上げる。抱きしめた腕はそのままで、兄は天井を見つめていた。視線の先を辿って、さらに見上げると、白い煙草の煙のようなモノが揺れながら消えて行った。

暫くそうして兄の腕の中で天井を見上げていた。静かでいつもと何も変わらない、自分の部屋。さっきあったことが、まるで夢だったかのように。涙でぐしゃぐしゃになった顔を兄のTシャツに擦り付けると、大袈裟に身を引いた兄の腹が大きな音を立てた。

少し赤くなった兄の顔を、じっと見て思わず吹き出した。ほっとして、可笑しくて、ベッドの上で笑い転げる。兄がいる、その事実が、私を素の自分に引き戻したのだ。涙が出るくらい笑って、枕に顔を埋める。笑いすぎだ、と兄に頭を叩かれ、やっと起き上がった。兄がコンビニ袋を開いて、こちらに向ける。中には甘そうな菓子パンにデザート、ジュースが袋いっぱいに入っていた。

完全には恐怖から抜けきれていないのか、目の端に床に散らばる猫の毛が気になるのか、食べ物が甘すぎるせいか、あまり進まない自分に反して、兄は次々とパンを胃袋に収めていく。

獣の臭いも煙草の匂いも、もうしない部屋の中に甘い匂いが充満し

ていく。出ていった猫が再び上がって来て、兄のそばで、パンのクリームを舐めていた。あまりにも、普通な日常の風景に、長い夢を見ていたような、そんな気分になった。泣き止んでから、兄は何も聞いてこないし、私も何も話さなかった。ただ、二人で、二人と一匹で黙々と、まるで与えられた課題をこなすように、食物を消費していた。

（八）連れていくモノ

結局、その夜両親が帰ってくることは無かった。代わりに兄が、私の部屋で寝ることになった。落ち着いたつもりだったが心配してくれたようだ。床にそのまま寝ようとした兄に、母が使う客用布団を勧め、自分もベッドに横になった。身体のあちこちが痛み、眠る体勢を整えるのに手間取る。

何度か寝返りをうち、壁を背にした状態で落ち着くと、寝息をたてている兄が視界に入った。仰向けに眠る兄の胸の上に猫が丸まっていた。少し寝息が苦しそうに見えて、苦笑しながら右手を伸ばして猫を起こす。ゆっくりと兄の上から降りると、ベッドに飛び乗り、足元に丸まった。

兄の寝息が落ち着いたのを、確認して目を閉じる。同じようにここで母が眠った時は、壁側に向いて寝た。母がそばにいることが、嫌でたまらなかった。一人きりの空間を邪魔される気がした。なのに今は、兄がそこにいることが嬉しかった。恐ろしいことがあったこの部屋で穏やかに眠れる。兄がいる、それだけのことで。

いつの間にか眠っていたようだ。眩しさに目が覚めた。まだ、起きなくてもいいくらいの早い時間だった。いつもよりも、かなり明るい気がするのは、自分の気持ちの高揚加減の違いかもしれない。

もう兄も、猫もいなかった。まだ少し痛む身体を起こして立ち上がると、部屋の扉を開ける。一階から人のいる気配がして、ほっとした。昨日は、怯えて進めなかった廊下を通り階段を降りた。途中立ち止まり、最上段を見上げる。そこには何も無く、いつもの階段があるだけだ。

思わずほっと息を吐き、そのまま下へ降りる。リビングの扉を開けようと手を伸ばした時、兄の声が聞こえた。電話で話しているようだ。話し方から相手は母だろう。電話を切った気配を確認して、ドアを開ける。こちらを向いた兄は一瞬躊躇して、祖母が倒れて病院に運ばれたと告げた。

心臓が激しく脈打ち、息の仕方を見失う。頭の中で、昨夜のあの声が繰り返し、繰り返し響いていた。

連れていく、と。

あれはそう言っていた。連れていくのは、祖母のことなのか？命を奪うということなのか？頭の中で思考が絡まり、足に力が入らず座り込んだ。兄に支えられソファに座らされる。隣に座った兄に肩を抱かれても寒くて仕方なかった。

自分が傷付けられる恐怖とは違う、新たな恐れが襲う。違う。そんな事を望んだ訳では無い。祖母を疎ましく思っていた事は事実だ。だけど、だからと言って死を望んだりはしない。両親の不仲だって、祖母のせいだけでは無い。

祖母のいる病院に連れて行ってと兄にすがる。兄が頷くのを確認すると、顔を洗いに洗面所に向かった。兄が二階に上がる足音が聞こえ、自室に入った気配がした。蛇口を捻り、冷たい水のまま、何度も顔を洗う。濡れたままで鏡に映った顔は、青白く自分の顔では無いかのようだった。

玄関の鍵を外から開ける気配がして、洗面所を出る。足早に入ってきたのは、昨日と同じスーツのままの、疲れた顔をした母だった。

父の着替えと、祖母の入院の支度をしに、帰ったと言う。祖母の意識はまだ戻らないらしかった。

学校は？と訪ねる母に、今日は土曜で休みだと告げた。手伝う、と言った私に一瞬驚いて、少し笑うと母は、ありがとうと言いながらリビングに入っていった。兄が父の着替えを用意する間に、シャワーから上がった母が支度を済ませるのを待って、3人で祖母の自宅へ向かった。

祖母の家に来るのは、もう何年ぶりだろうか。子供の頃は行事の度に訪れていたはずだ。昔、兄と遊んだ記憶が蘇る。ドジョウやザリガニを捕まえた用水路はもう使われていない。養蚕をしていた家屋は、屋根裏の広い特徴的な構えをしている。

玄関の引戸を入ると、懐かしい匂いがした。陽の入らない土間の冷たい空気に腕を擦った。傷付けられた肘と手首が少し痛んだ気がする。

広い土間の片隅に、子供が使うような小さなバケツが転がっていた。兄が覚えていると、それを拾い上げた。おそらく十年近くも放置されていたはずのそれは、つい最近も使ったように、薄い埃しか積もっていない。

そのバケツを見つめていると、遠い記憶が蘇った。しわのある、日焼けした大きな手。これがタニシだと、手のひらに乗せた貝を兄の持つバケツに入れる。泥だらけの自分と兄の手を引いて畦道を歩いた。あれは、あの手は。

ぼんやりと土間に立ち尽くす私を手招きながら、兄が裏口の戸を開けた。その軋んだ音に何故か嫌な気持ちになる。開いた戸を抜ける

のを兄も少し躊躇していた。

昔、兄とここを抜けて裏庭に出ようとした時、いつもよりも数段きつい声で、祖母に怒鳴られた。この先には行くな、と。一度だけ目を盗んで兄が裏庭に入った時には、顔が腫れるほど祖母に叩かれていた。兄はあの時の事を思い出したのかもしれない。

戸を抜けて、先に進もうとした兄の腕を引っ張り、引き留める。この先には行ってはいけない気がした。祖母があんなにも近寄らせないようにしていた場所。何があるのか好奇心もあった。何があっても、もう驚く事は無いだろう。それだけの体験を、ここ数日していたから。

戸の向こうから、風が入る。僅かだったが、あの獣のような臭いが混じっていた。この向こうにあのモノが何なのか、解明する何かがあるようだ。それでも、足は進まない。どうしても、昨夜の恐ろしい祖母の顔が思い出されて、動く事が出来なかった。

奥の部屋で、祖母の着替え等を用意していた母が兄を呼ぶ。今行く、と返事をして戸を閉めると、兄は母の所へ行ってしまった。一緒に着いて行こうと靴を脱ぎかけて、見下ろした土間に、古く大きなゴム草履を見つけた。これを履いていた人は。

懐かしい気持ちに鼻の奥がツンとする。脱いだ靴を草履の横に並べて、その隣に兄の靴も並べる。この並びに覚えがあった。あの頃は、私と兄の小さな長靴を並べていた。

ここから3人で、バケツと網と、竹で作った釣竿を持って、田んぼの畦や用水路周りで日が暮れるまで走り回った。魚や虫を捕まえ、花を摘んで。

（九）祀られていたモノ

ガタン、と戸が音をたてた。風のせいだったのか、少し開いている。その隙間を見つめ、どうしても確かめたくなった。この先に何があるのか。祖母が私達を近寄らせなかった理由は何か。

脱いで並べた靴を再び履くと、戸に近寄る。隙間に顔を寄せると、僅かに、あの獣のような臭いがした。顔を引くと、一度兄が入っていった部屋の入り口に目をやる。奥から母と話す兄の声と、ガタガタと物音がする。

ガタン、ともう一度戸が音をたてた。間近で聞こえた事に驚いて、戸を見つめたまま後ずさった。音をたてた原因が何かわからない。風ならば隙間から、こちら側に吹いてくるはずなのに。

拒まれているのか、それとも誘われているのか。恐る恐る戸に近寄る。一つ深呼吸をすると、思いきって戸を開けた。一瞬、祖母の怒り顔を思いだし、目を瞑る。風は無い。草の匂いと、木の朽ちた匂い。

ゆっくり目を開けると、手入れのされていない木の間に、奥へ進める隙間があった。地面には伸びっぱなしの雑草の中に、苔の生えた飛び石が続いている。

然程広くは無い裏庭に出た。日は入るのに何故か肌寒さを感じる、古いブロック塀に囲まれた細長い敷地。僅かに感じる獣の匂いは、飛び石の続く奥からするようだ。

一つ目の飛び石に足を進める。苔で滑らないように、慎重に足元を

見たまま、二つ目の飛び石に移ろうとした時、自分の先を歩く裸足の痩せた足が、三つ先の飛び石から足を離すのが見えた。

慌てて視線を上げたが、目の前には誰もいない。葉の繁った木に囲まれた、少し暗い空間が続くだけだった。やはり、誘われていると感じた。心細さに見舞われたが、それでも奥に進もうともう一つ飛び石を踏む。

一つ一つゆっくりと飛び石を踏みしめ、先に進む。すぐに獣の臭いと朽ち木の匂いが強くなり、少し開けた場所で飛び石が終わった。

最後の石の上で立ち竦む。目の前には、薄汚れ苔むしたブロック塀があり、その前に朽ちた角材が積み重なっていた。獣の臭いは数段強くなり、その発生源は角材の下のようだった。

袖口で口元を押さえ、しゃがみこんで積み重なった角材をよく見る。サイズは様々で、どれも短い。黒く変色し、腐って潰されたような折れ方をしていた。隙間に白い陶器の破片もある。

肩を叩かれ、思わず飛び上がりそうになって崩した体勢を、後ろから支えられた。兄がいつの間にか、そばに来ていた。一瞬早くなった呼吸が落ち着くと、屈んで角材の山を見つめる兄の腕を掴む。

祠だった、と兄が呟く。昔、ここに建っていたのは小さな祠だったと。何かを持ってここに向かう祖母の後を、こっそり付いて来て、見たんだと言う。

持って来た物を供え、一心に何やら拝む祖母が怖くなって逃げようとした所を、見つかって叱られたのだと言う。あの時も嫌な臭いがしていたのだと。

そして、そばに落ちていた木の枝を拾うと、崩れた祠だったと言う朽ち木の山を掘り出した。腐っていた角材は、簡単に形を無くし、獣の臭いが強くなる。顔をしかめながら枝を動かす兄の手元を見つめ、これで終わると確信していた。

角材を退けて、出てきたのは、小さな獣の亡骸だった。それに被さるように、もう掠れて読めない文字が書かれた木片。御札か何かだろうか。

その獣に見覚えがあった。ペットショップや、動物園で見たのでは無い。先日、兄の部屋で猫と争ったモノが落とした毛と同じ色の体毛、そして、昨夜自分の前に現れた祖母の頭部の下に付いていた極端に小さな体。あのモノの正体は、これに違いない。

何故、この小さな獣が祖母の顔をして、自分を襲ってきたのか。自分だけでは無いだろう。恐らく兄も、そして祖母までも。怪訝な顔をしていたのに気づいたのか、兄は朽ち木を亡骸に再び被せると短く手を合わせ立ち上がった。

訳がわからないまま、同じように手を合わせて、来た飛び石を戻る兄の後を慌ててついて行く。一つ石に足を滑らせよろけた。一度、立ち止まり祠の跡を振り返る。何故だか空気が変わった気がした。獣の臭いはしない。

僅かに煙草の匂いがして、空を見上げた。同じように兄も立ち止まり上を見ていた。昨日と同じように煙のようなものが、空へ消えて行く所だった。そして、小さく掠れた声で、ありがとうと聞こえた気がした。

兄が再び歩き出すのを追いかける。戸を抜け、土間を通り、靴を脱いで部屋へ入る。仏壇と炬燵のある居間を通り、襖を開けると祖母の寝室だった。この部屋に入るのは初めてだ。

ベッドに、和ダンス。座卓が置いてあるだけの、ガランとした部屋。すぐに、ベッドの脇に座って壁を見つめる母の姿が目に入った。兄と自分に気付き、振り向いた母の目は真っ赤になっていた。

泣いていたのだろうか。すぐに壁に視線をもどした母につられ壁を見る。そこには、たくさんの写真が貼られていた。兄に促され、近づいてみる。セピア色になった古い写真達。その全てに、私達家族が写っていた。

一番大きな写真は、父と母が並んで立つ前に、幼い兄を抱いて座る僅かに微笑む祖母。そして、祖母の隣に、産まれたばかりの私を抱いて笑う今は亡き祖父の姿があった。

大きな写真を囲むように貼られていたスナップ写真の一枚は、泥だらけの顔で笑う兄と自分を抱き上げる祖父が写っていた。幼い兄と自分の手をひいていた、あの大きな手は。二人の小さな長靴の間に並べた、ゴム草履の持ち主は。

一番新しい写真は、布団から半身をお越し、こちらを見て笑う浴衣姿の少し痩せた祖父の姿だった。その写真に写る浴衣に手を這わせる。この、浴衣の模様は。

そうだ。あの煙草の匂いは、祖父の匂いだ。兄と私がここに来ると、いつも暗くなるまで外で遊んでくれた、大好きだった祖父の。

肺を悪くして寝てばかりになっても、会いに行けば、よく来た、と

頭を撫でて笑って迎えてくれた。大好きだったのに、何故、忘れてしまったのだろう。

あのヒューヒューと息が抜ける喉の音は、泊まりに来た日に一緒に寝た布団の中で、祖父の腕の中で聞いていた音だ。規則的なその音に安心してすぐに眠れた。祖父が元気だった頃は、ここに兄と共によく訪れていたのだ。

祖父が亡くなると、元々気難しかった祖母は、更に難しい性格になり、こちらからは、全く会いに行かなくなってしまった。時々父を訪ねて祖母が来ると、二階に上がり顔を合わせる事もしなくなってしまった。

壁の写真の何枚かには祖母も写っていた。こうやって笑っていた時もあったのだと、胸が痛くなる。ぎこちなくだけど、笑うその姿は今の祖母からは想像できない。この写真達を祖母は毎晩眺めていたのだろうか。

不意になった電子音に、はっとした。兄と同時に母を見る。携帯を取り出し応答した母が、また少し涙ぐんでこちらを見る。携帯を持ったまま、ホッとした表情で、祖母の意識が戻ったと、もう心配無いと言った。

張り詰めていた緊張が切れ、祖母の寂しさ、祖父の気持ち、それぞれが込み上げた。涙ぐむ母にすがり崩れる。涙が止まらず、嗚咽も堪えられない。兄も天井を見上げ、涙をこらえているように思えた。

此処にいるモノ

猫の鳴く声で目覚めた。あの日、この部屋で兄と眠ったあの夜から、猫は毎晩私のベッドの上で眠るようになった。朝、出ていきたくなるとドアを開けろと鳴く。

カーテンの隙間から漏れる光はまだ早い朝の陽射しだ。もうしばらく起きなくても学校には間に合う。もう一度眠ろうと布団を引っ張りあげた隙間に猫が入りこみ、盛んに顔をなめ回し始めた。

ざらりとした舌の痛いくらいの感触に耐えきれず、布団から起き出してドアを開けると、猫は勢いよく部屋を飛び出して階段を降りて行った。

後を追うように階段に近づくと、階下から派手な音が聞こえた。おそらく調理器具を床に落としたのだろう。音の原因を想像して苦笑いしながら階段を降りる。

以前は、大きな音が階下から聞こえると部屋に閉じこもって争いが終わるのをじっと待っていた。この家で聞こえる音は苦痛でしかなかった。

リビングのドアを開ける。続くキッチンに立つ父の姿に頬が緩む。母のエプロンをしてワイシャツの腕を捲り、フライパンからテーブルに並べた皿に、少し焦げた目玉焼きを移しているところだった。

父の足元には猫が、餌をねだってまとわりついている。その横には転がった空の鍋。吹き出しそうになるのを堪えて、鍋を拾いながらおはようと言った。

罰が悪そうにこちらを見て早いな、と父が言う。猫の餌入れにドライフードを入れて、猫の頭を撫でた。右側の耳の端に小さな切れ込みがある。あの恐ろしい出来事は夢だったのではという思いを否定する事実。

後ろで、味噌汁を先に作るんだった、と呟く父の声を聞いて耐えきれずに吹き出した。そのまま洗面所に向かう。

鏡を覗く。少し太ったかもと頬をつまむと、後ろから兄が笑いながら覗きこんだ。鏡越しに睨んでから、水で顔を洗う。

以前のような穏やかな朝を迎えている。以前と全く同じではないけれど。また、大きな音がして父の慌てた声に兄の笑い声が重なる。前髪の雫を丁寧に拭き取ってからリビングに戻った。

冷めたご飯に焦げた卵、熱々だけど味の薄い味噌汁。うまくない、と文句を言いながら、兄があっという間に平らげた。むっとしながら黙々と箸を動かす父を眺めながら、自分の皿も空にする。

祖母が入院してから1ヶ月。朝、仕事前に病院に寄るようになった母の代わりに、父が作る朝食はなかなか上手くならない。大学が休みの日に兄が作る方が断然美味しいのに、父は頑なに自分が作ると譲らない。

祖母の世話をする母への感謝を上手く表現できないでいるだけ、と兄が言うので私も手伝わずにいる。父の味だと思うと何故か愛しくて、卵の焦げたところまで全部食べてしまった。

ガチャガチャと音をたてて洗い物をする父の背中を眺めて耳をすま

した。今、この家で聞こえる音は、平凡な日常の幸せな音。苦痛だった音は、今は聞こえない。

病院に寄っていくからと、早く出発した兄を見送った。兄も、そして私もあれから何度も祖母の見舞いに行っている。家に来ると、部屋に閉じ籠り会わずに避けていた祖母に会いに行っているのだ。

相変わらず眉間に皺を寄せた気難しい顔をしている祖母に、小言を言われながら世話をする母が何故か楽しそうで、その母を見るのが兄も私も嬉しかった。

あの頃、家に帰らなかった兄も、一人で家に居続けた私と同じように寂しかったに違いない。今は家と大学と病院を行ったり来たりして、必ず誰かと一緒にいるみたいだ。

片付けが済んで新聞を広げる父に声をかけて家を出た。始業時間にはだいぶ早い。朝の透明な空気をいっぱいに吸い込んで、自転車のペダルを踏んだ。

祖母の自宅の庭先に自転車を停めた。祖母が留守の間、庭の花木や草花に水やりをする約束をしていた。頼み事をする時にも無表情なままだった祖母が、その日の帰り際に家の鍵を渡してくれた。台所の戸棚に買い置きの菓子があるからと。

水やりを終えてホースを巻いた後、鍵を使って玄関から中へ入る。台所の戸棚からクッキーの箱を取り出して中を開けると、一枚選んで頬張った。そして、母に言われた通りに台所と居間、祖母の寝室の窓を開けて、新しい空気を入れる。

一瞬、煙草の香りがした。まだ祖父の残り香がこの家にはあるのか

もしれない。仏壇に供えられた未開封の煙草を一度手にとって、真ん中に置き直すと手を合わせた。

玄関に戻り、祖父のゴム草履を靴下のまま無理矢理履いてみる。時の流れのせいでゴワゴワとした履き心地だ。そのまま、裏庭に向かう。

戸を開けると、視界にいっぱいの緑色、木の葉が風に揺れている。脱げそうなゴム草履を、一歩ずつ飛び石に運んで、奥へ進んだ。

あの日、祖父の影に導かれてここに来た。朽ちた祠の破片に埋まっていた小さな獣の亡骸は、あの後兄が丁寧に埋めて、今は一本の若木が植えられている。

夏に真っ白な花を咲かせるシャラの木。祖母も、そして祖父も大好きな花だと父から聞いた。植えてもいいかと兄が尋ねたが、祖母は祠の存在を全く覚えていなかった。

祖父が亡くなり、子供や孫が訪れなくなったこの大きな家に一人で暮らしていた祖母は、淋しさに押し潰されてしまったのだろう。あの獣はそんな心の隙間にとり憑いたのか、人を求める心に同調してしまったのか、今となってはわからない。

そう遠くない夏の日、ここで兄と両親と、退院して元気になった祖母と、風に揺れる白い花を眺めよう。兄の話に両親は笑い、祖母はきっとまた難しい顔をしているに違いない。

そして、その時此処には、あの浴衣姿で裸足にゴム草履を履いた、煙草の匂いのする祖父もいる。もう姿を見る事は無いだろうけど。

風が若芽を撫でていく心地好い音を聴いた。ゆっくり戻る飛び石をゴム草履で踏む音も。

開け放した窓を閉めると、玄関を出て鍵をかける。手のひらに乗せた小さな鍵を見つめた。もう二度と手を離さない。今の小さな幸せが、またバランスを崩しそうになっても、私は二度と逃げたりしない。

手をきつく握りしめて、顔を上げたその時、風の中にうっすらと煙草の匂いがした気がした。もう大丈夫。次は私が守るよ。薄い煙が上がって消えた、青い、青い空を見上げて誓った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1814m/

此処にいるモノ

2011年4月17日12時54分発行